

信を いれ で たい。海を

前編 あれから1年。 三陸の海は取り戻せたのか!? 3.11ドキュメント

東日本大震災から1年後、未曾有の津波が襲った三陸の海からレポート!

撮影=越智隆治 ●●
レポート=寺山英樹 ●●
取材協力=三陸ボランティアダイバーズ ●●
特別協力=The More Project Japan ●●
デザイン=Panari Design

ついに収穫の時期を迎えたワカメは復興のシンボル

あれから1年。2012年3月11日。岩手県大船渡市高田町越喜来泊。すべてを飲み込んだ海の中にいる。

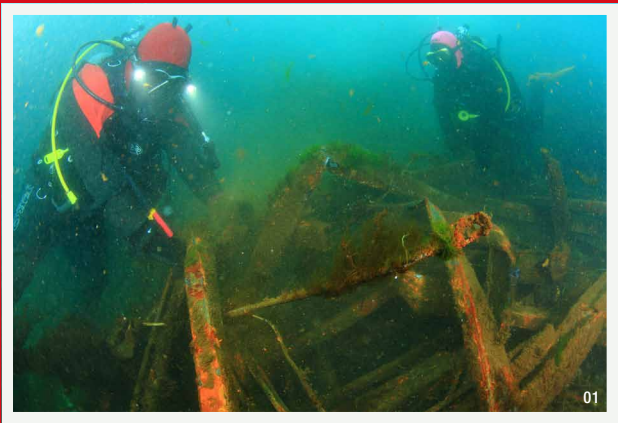
水温3度。時に4度。ドライスーツの下は、いつも以上に着こんだインナーウェア。さらにその上にホッカイロを4枚貼って臨んだものの、強烈な寒さにくじけそうになる。唯一、直接水に触れている口の周りは冷たくはない。

痛い。「この水温だったのか……」。改めて、あの日の津波を思う。

ぼろぼろ折れた電柱、ひしゃげた鉄骨、絡み合うロープの束。海の中は、そこかしこにまだまだあの日の爪跡が残っている。ダイビングサービス「みちのくダイビング・リアス」の佐藤寛志氏が、目の前でそんなガレキの山と対峙している。彼のこの1年は、ガイドではなく、「NPO法人 三陸ボランティアダイバーズ」（以下三ボラ）の理事長としての活動がほとんどである。

130キロの立派な体躯と人柄そのままの人懐っこい笑顔で“くまちゃん”の愛称で親しまれているが、水中ではフルフェイスのフードに笑顔をしまい込み、頭の両サイドにライト、足ではなく腕にナイフを装着し、黙々と作業をこなしていく。手元を照らしながら作業ができるように、すぐにナイフが取り出せるようにという、海底清掃のための工夫だ。

船 上から降ろされたロープをガレキの一部にくくりつけ、時にナイフで切り離し、くまちゃんがロープをクイクイっと引っ張るのを合図に船上の漁師や三ボラのメンバーたちがロープを手繰ってガレキを引き上げる。ガレキが引き上げられると、再び水



あれからちょうど1年。ダイバーが各地から集まり、すべてを飲み込んだ海に花を手向けた。魂よ安らかなれ



01 ボランティアの手の入っていない海中は、1年経った今でも、まだまだガレキが山積みになっている

02 この日、被害が甚大だった陸前高田市では大規模な追悼式が行われた

あれから1年。

哀悼

忘れないために

中のくまちゃんのもとへロープが投げ込まれ、それをガレキにくくりつけ……この一連の作業が黙々と1時間続く。

その手際の良さや装備の工夫が、この1年の海底清掃の積み重ねを感じさせる。

1時間ほど潜っている間に、指先の感覚は失われ、痺れてくる。口の周りにはもはや感覚さもなく、体が小刻みに震え始める。「戻りたい」。その願いは浮上サインひとつで叶うが、あの日は叶わなかった人が大勢この海にいた。

『遺体』（石井光太著・新潮社）というルポタージュの中で、津波に流されたものの、浮いた屋根の上に這い上がって一命を取りとめた女性が、海から助けを求める描写がある。結局、闇夜の中でどうすることもできず、潮に乗って沖へと流され、「助けてください、助けてください」という声と共に闇の彼方へ彼女は消えていってしまう。「立っているだけで震えが止まらなくなるほどの寒さで、濡れた服装のまま海面を漂流して朝まで耐え抜くのは難しい」。戻る術のない彼女の痛さ、絶望は想像を絶する。

エグジット後、集まった三ボラのダイバーや漁師たちは、手を合わせ、花を海に手向けて、思い思いに黙とうを捧げた。悼むために。忘れないために。

信海それ
じをでも
たい。前編

あれから1年。三陸の海は取り戻せたのか!?

3.11ドキュメント



ガレキの引き上げからワカメの収穫へ！



ファンダイビングも再開！

ガレキの撤去作業の合間にファンダイビング。あいにくの水温で(笑)、生物は少なかったが、ガレキだらけだったのが信じられないほどきれいな海底。「夏ごろにはお店も再開したいですね」という、くまちゃんも徐々に海を取り戻しているようだ。ガレキ撤去より、大きな体で小さな魚を探すぐまちゃんの方が、微笑ましく、躍動している



「なんせ、震災後、初めての収穫だかなんあ」。三ボラと共に、三陸沿岸地域の復興のために尽力してきた佐川富廣さんは嬉しそうに言う。復興支援越喜来漁協理事という肩書きから漁師に戻った佐川さんの視線の先にあるのは、希望。昨年末に種苗を入れたワカメである。

内湾に張られたロープにしがみつクワカメは、近づいて水面から見ると、立派に成長していて、下の方は潮にたゆたっている。潜ってみると、まるで、希望にたなびクワカメの吹き流し。

越喜来湾では、震災に伴う大津波で、ワカメを始めとするホタテやカキ、ホヤなど、養殖が全滅。ようやく昨年末にワカメの養殖を再開し、いよいよ収穫を迎えるのだ。

すべてを飲み込んだのが海ならば、すべてを与えてくれるのも海。絶望も希望も抱えて海は変わらず海として在る。海の生物たちははたかた、すぐに元の元気を姿を見せたが、人はなかなかそうはいかない。



北海道・奥尻島で大津波に遭遇し、間一髪で難を逃れるという経験をした水中写真家の中村征夫氏は、「海は素晴らしい、と今さら言えるか」と自問自答した末、ようやく2ヶ月後に奥尻の海に潜り、海を取り戻した。

あの日から1年。午前中にガレキを引き上げていた船が、午後にはワカメを引き上げている。復興には程遠いが、漁師たちも徐々に海を取り戻しつつある。まだまだワカメの量は少ないというが、「漁師にとって震災後初めての稼ぎ。復興の兆しだ」と、佐川さんも前を向いている。



ワカメをしゃぶしゃぶのようにさっと湯に通すと鮮やかな緑色に。ボン酢をつけて食べるのが漁師流

あれから1年。
希望
前を向くために

それでも
海を
信じて
前編

あれから1年。三陸の海は取り戻せたのか!? 3.11ドキュメント



三ボラ理事長のくま
ちゃんこと佐藤寛志氏

タイのクルーズにスタッフとして乗っていたくまちゃんのもとに無線が入る。津波。とっさに「またスマトラか」と思ったが、よく聞けば日本。それも生まれ故郷の東北だという。すぐに家族の安否は確認できたものの、翌日帰港するやいなや、家族のいる岩手を目指していた。

震災直後の混乱で新幹線も高速道路も動

信そ じれ で たも い。海 を

かず、飛行機も原子炉の問題で太平洋側は飛ばないという状況。羽田経由で秋田空港へ飛び、さらに家族に迎えにきてもらった車でようやく岩手にたどり着いた。いつも通っているはずの道がどこを走っているかすらわからない惨状。親戚は5人助からなかった。

ダイバーの自分にはできることは何か。答えはひとつ。潜るほかない。

「海を、そして川をきれいにしよう」。海をきれいにしないことには、漁師の生活は戻らない。川をきれいにしないことには、サケも帰ってこられない。

遺体捜索のため、しばらく海に近付けなかったが、震災からおよそ1カ月後。くまちゃんと漁師の2人きりからガレキ撤去は始まった。

やがて、活動を知った友人のダイバーたちが次々に連絡をくれて、次第に輪が広がっていき、気づけば支援の輪は世界中のダイバー仲間にも広がっていた。そして、ついには、4月末、〈三陸ボランティアダイバーズ〉が立ち上がり、本格的に支援活動を展開する。

後編

あれから1年。
三陸の海を取り戻せ!

三陸ボランティア ダイバーズの1年

漁師とともに、東日本大震災で被災した

三陸沿岸地域の復興を手伝うために集った三陸ボランティアダイバーズ(以下三ボラ)。

「三陸の海を取り戻せ!」を合言葉に奮闘してきた三ボラの1年、そして、これから。

写真=中村卓哉(T.N)・●、三陸ボランティアダイバーズ・●●

海底に沈んでいた漁具のロープを引き揚げたボランティアメンバー。ロープには緑鮮やかな海藻が生えていた。2011年9月25日、宮城県女川町の竹浦漁港



ボランティアの基本は、「安全を考えて、できる範囲のお手伝いしかない」こと。事故を起こしたら元も子もない。メンバーはレジャーダイバーがほとんどだが、1人潜れば3人のヘルプが必要で、陸上や船上のサポートもとても大事な役割。海辺でできることもあるし、プロが潜って整備された後ならチャリティーダイブもできる。一緒に潜ってきれいになった海を見て伝えることも大事。潜れなくてもできることは山ほどあった。

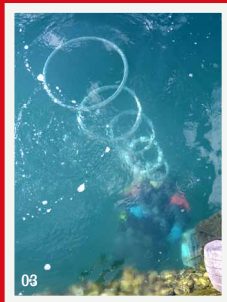
くまちゃんが1人で潜っていた当初は、「1人が潜ってどうなるんだ」という冷やかな視線もあったが、ワカメをボイルする機械や使えるような漁具が上がるのを目の当たりにすると漁師



- 05 ポリタンクのお湯をかぶるサーファースタイル。2011年4月30日
- 06 ダイバー、漁師、行政の三位一体での復興活動。2011年11月18日 (T.N)
- 07 水中のガレキにダイバーがロープをくくりつけ、船上や港から引き上げる。2011年11月18日 (T.N)
- 08 震災直後、多くのダイバーから支援が寄せられ、くまちゃんたちによって現地に届けられた。2011年3月30日
- 09 ラジオ出演するくまちゃん。伝えることも大事なこと。2011年6月1日
- 10 三ボラが立ちあがった当初、綾里漁港のナマコ養殖場は壊滅状態だった。2011年5月5日



“楽しみながらボランティア” 三ボラ行くとこ、いつも笑顔があふれている



- 01 ボランティア活動を通じて、地元漁師とはすっかり仲良しに。2012年2月24日
- 02 サケの遡上を確認中のくまちゃんを見守るダイバーたち。2011年10月22日
- 03 シビアな作業だからこそ遊び心も忘れない。2011年10月26日
- 04 雨にも負けず、雪にも負けず。2012年2月4日



それでも
海を
信じて。
後編

たちは「おー」と盛り上がり、目の色が変わってきた。だんだん漁師の輪も広がっていき、行政も動き始めて重機を投入。ダイバー、漁師、行政が三位一体となって、大きなムーブメントとなっていく。

“くまちゃんハウス”と呼ばれる小屋を拠点に、これまで述べ2000人のダイバーたちが、漁師とタッグを組んで、海や川のガレキ撤去や海辺の清掃はもちろん、仮設住宅への激励や各メディアへの呼びかけなど、あらゆる角

度から支援を行なってきて、今なお続いている。三ボラが地域に果たした役割は大きい。

三ボラには女性参加者も多く、現場は笑顔にあふれ、明るく和やかだ。「下を向きながら辛い作業をやっているも仕方ない。楽しみながらボランティアです」と副理事長の早乙女祐基さん。いつも満面の笑みだ。



港で流木を引き上げるメンバーたち。2011年7月16日



あれから1年。三陸の海を取り戻せ！ 三陸ボランティアダイバーズの1年



©ocean+ ウェブマガジンの二次配布および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



Information Link
<http://sanrikuvd.org/>

← 関連情報HPへ

ガレキを積みかにするインバタング。海の生き物はたくましい（TK）

それでも
海を
信じたい。
後編

01



02



海の生物はどうなったのか？

内湾の奥の方はダメージも大きく濁りもひどかった。生物も少ない。しかし、湾から少し離れば海もそこに棲む生物も変わらずに元気だった。海藻もワサワサ生えているし、魚もたくさんいる。ダイバー

に人気のダンゴウオも見つかった。「人の手の入った場所は

ダメージが大きい、もともと自然の場所は元気」とくまちゃん言う。

ダイビングスポットだった浪板海岸は、震災後一変。海水浴場でもあるビーチは壊滅。浜辺を囲む林は海水をかぶって枯れ、土砂も崩れ落ち、雲囲気が変わってしまった。

当初、水中もガレキだらけだったが、新居ができたとばかりに、海の生物たちはすぐに棲み付いた。

海の生物たちはたくましく、したたかだった。



- 01 コケギンボ
- 02 エムラミノウミウシ
- 03 リュウグウハゼ (T.N)
- 04 アサヒアナハゼ



海の生き物たちはしたたかだった……

03



04



あれから1年。三陸の海を取り戻せ！ 三陸ボランティアダイバーズの1年



ダイバーがガレキ撤去に入った海は見事にきれいになっていて、早めに撤去作業をしたところには海藻が生えている。やればやるほど目に見えて成果があがるのだ。しかし、「40箇所を作業していますが、全体でいえば数パーセントにしか過ぎない。9割以上の海が手つかずのまま残っているのが現状ではないでしょうか。港を出ればすぐ漁場。そういうところにまだまだガレキが残っています」とくまちゃんと言う。着実に復興の歩みを進めているが、まだまだ足りない現実もそこにある。

あれから1年。三ボラはどこへ向かっていくのだろう?

「基本的にはガレキ撤去などボランティア活動はまだ続くとします。ただ、ガレキ撤去で漁業を復活させながらも、ダイビングの可能性も探っていきたい。さらに、せっかく漁師たちとも絆ができたので、一緒にやれることも考えていきたい」

実際、漁の体験ツアーの準備が始まり、秋にはサーモン

スイムが開催される予定だ。ワカメの収穫が復興の兆しであるように、経済的に活性化して始めて復興だろう。そういう意味では、くまちゃんがガイドに戻ったときが本当の復興が始まったと言えるのかもしれない。

ビーチポイントである浪板海岸のガレキはダイバーたちの手によって撤去され、今ではすっ

かりきれいだ。地盤沈下で水位が変わり、地形も変わってしまった。津波の影響もあちこちで見られるが、逆にそうしたのを見るのは興味深く、また大事なことでもある。



水温が上がってくれば、中層を魚群が行き交い、ダンゴウオやフサギンボなど、北の人気者が姿を現すだろう。夏になれば季節来遊魚も津軽海峡を越えてやってくる。

「今年の夏をメドにお店を再オープンできたら、と思っています。水中の安全は今のところ確認できているので、あとは施設を再び整えることが課題ですね」

今でもボランティアの合間にファンダイビングも受け付けているそうだから、ガレキ撤去だけでなく、たまには黒潮と親潮の影響を色濃く受ける三陸の海で遊んでみてはいかがだろうか?

「これからは海を楽しんでいきたい。そういうことも大事です」。すべてを飲み込んだ海だけに、くまちゃんは、それでも海を信じている。

潜る以外にもできること

三ボラメンバーは仮設住宅を訪ね、お茶会を開催したり、手芸を教えたり、地元の方々と積極的に交流している(写真01,02)



三陸の海を取り戻せ。そして、さらなる一步を踏み出す



希望あふれる子供たちの絵

それでも海を信じた。後編

あれから1年。三陸の海を取り戻せ! 三陸ボランティアダイバーズの1年

三ボラの絆が生んだ ダイバー 2000人の輪



それでも
海を
信じた。
後編

あれから1年。三陸の海を取り戻せ！ 三陸ボランティアダイバーズの1年





01 ~ 04 全国のダイバーから、届いた熱いメッセージ。こうした声も三ボラの原動力となっている



これまで三ボラの活動に参加してくれたダイバーは述べ2000人以上。その他、実際の活動に参加していなくても、物資を送ってくれたり、Tシャツを買ってくれたり、メッセージを届けてくれたりした世界中の仲間を合わせれば数え切れない人数になる。

大震災は、暗い影を落とした一方、こうした絆も生んだ。影が濃いだけに、絆も強い。こうしたつながりを大事に、皆でできることを続けていきたい。

三ボラの絆が生んだ ダイバー 2000人の輪



それでも
海を
信じた
後編

 **三陸ボランティアダイバーズ**
SANRIKU VOLUNTEER DIVERS
<http://sanriku.org>

活動内容の
お問合せ先

三陸ボランティアダイバーズ 担当=早乙女
info@sanriku.org <http://sanrikuvd.org>

あれから1年。三陸の海を取り戻せ! **三陸ボランティアダイバーズの1年**

 ocean+

©ocean+ a ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

 **Information Link**
<http://sanrikuvd.org/>

 関連情報HPへ